ジイジ・バアバ、パパ・ママへ贈る

# 心のめばえ

アヤと過ごすジイジの日記

<5>

著者／牟田 泰三
挿絵／橋本 礼子

## 3歳5カ月
## 落ち葉

秋も深くなると、街路樹から落ち葉が落ちて道ばたに溜まっている。それが乾燥するとパリパリになって、踏みつけるとサクッと小気味よい音がする。アヤとお散歩しているとき、ジイジが乾燥した落ち葉をサクッと踏んだら、

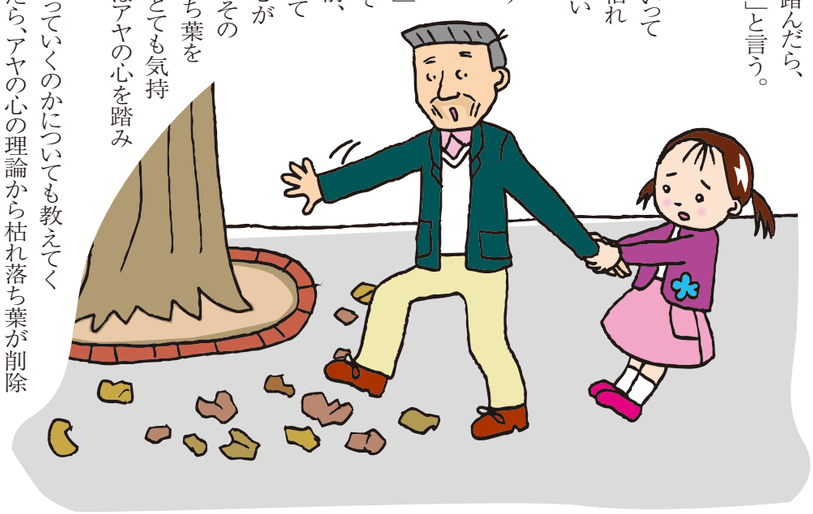
アヤ「ジイジ落ち葉を踏んじゃだめっ！」と言う。

ジイジ「えっ、どうしていけないの？」

アヤ「落ち葉がこわれるでしょ。」

ジイジ「ふーん。でも、踏んだらサクッといって気持ちがいいよ。それに、落ち葉はもう枯れて用がなくなったんだから、粉々にしておいたほうがお掃除しやすいんだよ。」

アヤ「だめ、落ち葉が痛い痛いって言うから。」



えっ、あっそうか！　アヤの「心の理論」では、枯れた落ち葉にも心があるんだ。そういう感じ方もあったんだ。そうだ、以前、小さなカニさんにも心があることを教えてしまったではないか。枯れた落ち葉に心があると思ってしまうのは当然の帰結だ。そのようなアヤの目から見ると、ジイジが落ち葉を踏んでサクッというのを喜んでいるのは、とても気持ちの悪いことなのかも知れない。ジイジはアヤの心を踏みにじっていたんだ。ごめんねアヤ。

心の理論は、人の感性がどのように育っていくのかについても教えてくれるように思われる。何歳ぐらいになったら、アヤの心の理論から枯れ落ち葉が削除されるのだろうか。それとも、生涯その考えは変わらないのだろうか。

このことがあってから、ジイジはいろいろと思いをめぐらしていくうちに、ふとお釈迦様の言葉に思い至った。「天上天下唯我独尊」、これは、お釈迦様が生まれてすぐに天と地を指さして言われた言葉であると伝えられている。

この言葉を、ジイジは長いあいだ誤解していた。「天上天下唯我独尊」という言葉は、「この世の中で最も偉いのは私（お釈迦様）だけだ。」という意味だと理解していて、何という傲慢さだろうと思っていたのである。

しかし、この言葉にはもっと深い意味があって、私の単純な解釈は間違っているということをある和尚さんに教えられた。「天上天下唯我独尊」という言葉は「この世の中でただ我のみが尊い」と読む。これを素直に解釈すると、「この宇宙で我は一人しかいない、かけがえのない我である。だから尊い」となる。ここで、「我」は自分自身を指すと同時に「個々人の我」をも指している。「唯我独尊」は「個々の我がそれぞれ尊い」と読むことができ、したがって、「天上天下唯我独尊」は「この世の中で生きとし生けるものはそれぞれがみな尊い」と理解することができる。

あれ、そうすると、恐れ多いことではあるが、アヤの「心の理論」はお釈迦様の考えと同じではないか。普遍的な愛というものは幼い心にすでに芽生えているのだ。幼い心の中にはお釈迦様が宿っている。年を経るにつれてそれが失われていくのは淋しいことである。

**ジイジの気付き**

幼児には博愛の心が宿っている。なのにどうして世界の平和は保たれないのだろう。

**プロフィル**　むた・たいぞう　1937年、福岡県生まれ。九州大学理学部卒業、東京大学大学院物理学専攻修了、理学博士。京都大学助手・助教授、広島大学教授・学長、福山大学学長などを歴任。主な著書に「語り継ぎたい湯川秀樹のことば」（丸善出版）、「電磁力学」（岩波書店）、「量子力学」（裳華房）などがある。東広島市在住。

**ジイジへのお便り**

エッセーを読んだ感想などを、お寄せください。
weekly@pressnet.co.jp
「心のめばえ」係へ